専門医に聞く最新医療情報2017

「肺がん」の早期治療の重要性

お尋ねした
専門医の先生は

熊本大学生命科学研究部
呼吸器外科分野　教授
鈴木　実先生

今年7月に更新された国立がん研究センターの2016年のがん罹患数では、肺がん罹患数は一貫して増加傾向にあり、大腸がん147,200人、胃がん133,900人に次ぐ133,800人で第3位です。また今年6月に厚生労働省から発表された2016年の肺がん死亡数は73,820人で全がん中第1位となっています。（図１）あらゆるがんの中で、肺がんは罹患数も死亡数もトップレベルであり、その治療成績向上が急務である事がおわかりいただけると思います。

ただし最も注目すべき点として、2015年の肺がん死亡数が74,378人であり、過去一貫して増加傾向にあった肺がん死亡数が、昨年初めてわずかですが減少しています。この原因はわかりませんが、もしかしたら、2015年末に承認された新規免疫治療薬や、それ以外の新規分子標的薬など、化学療法の進歩が寄与している可能性があると思います。肺がん診療ガイドラインという本がありますが、ここ最近、毎年、化学療法分野が大幅に更新されている点は、考慮に値すると思います。

また昨年1月、国立がん研究センターよりがん治療後の10年生存率が初めて発表されました。従来、がんの治療成績を示す指標として5年生存率が用いられます。治療後5年の時点で何パーセントの患者さんが生存しているかを示します。長期的ながん治療成績評価として10年生存率は、そのがんの性格を表す意味でも重要な指標となります。今年7月に更新された最新データでは、肺がんは5年生存率44.7%、10年生存率32.6%と、5年後以降も下がり続ける事が示されました。肺がんが治りにくい疾患である事を表しています。

また肺がん手術症例に限ると5年生存率は79.1%、10年生存率は59.0%と、全症例と比べ格段に生存率が上がっています。手術治療が有効であると判断される症例に手術を行うことが最も効果的な治療法である事を示しています。

さらに今回の発表で、肺がん治療として手術が選択される割合は、2000-2003年診断症例の47.1%、2006-2008年診断症例の58%である事も示されました。徐々に手術症例が増えている事がわかりますが、おおざっぱに言いますと未だ4割の患者さんが、進行した状態で肺がんが発見されているのです。

以上から、肺がんの早期発見症例が増えれば、手術になる症例も増え、結果的に肺がん治療成績がさらに向上する事がわかります。なお今回の10年生存率は2000年から2003年に初回治療を受けた患者さんのデータです。肺がん治療はその後、新規抗がん剤、分子標的治療から最近では免疫治療と、進行例に対する治療法も格段に向上しています。肺がん発症予防として禁煙はもちろんのこと、無症状のうちに発見して治療する事が大切です。そのためには肺がん検診か人間ドックを有効に活用するのが良いでしょう。一人でも多くの方が肺がんに対する早期発見・早期治療の重要性を認識していただき、罹患数・死亡数が減る事を願って止みません。

（図1）

がん罹患数予測（2016年男女計）

部位（上位）	罹患数
大腸	147,200
胃	133,900
肺	**133,800**
前立腺	92,600
乳房	90,000

肺がん死亡数（人）

2016年	73,820
2015年	74,378

国立がん研究センター発表

企画・制作／西日本新聞広告社熊本

公益財団法人
熊本県総合保健センター
熊本市東区東町4丁目11-1 ☎096(365)8800
http://www.souho.or.jp/

医療法人 潤心会
熊本セントラル病院
菊池郡大津町室955 ☎096(293)0555(代)
http://www.kchosp.or.jp

熊本赤十字病院
熊本市東区長嶺南2丁目1-1 ☎096(384)2111(代)
http://www.kumamoto-med.jrc.or.jp